

学習効果から見る多媒体型教材
—『日本語初級(及び中級)総合教程』(CD-ROM 付)を例に—

LEARNING EFFECTIVENESS OF MULTIMEDIA TEACHING MATERIALS
—"Comprehensive Course on Elementary and Intermediate Japanese Language
Learning"
(Books Plus CD-ROM Edition) —

李 姐莉 湖南大学
谷部弘子 東京学芸大学
案野香子 静岡大学
鐘 暉 湖南大学大学院生

LI, Dali, Hunan University YABE, Hiroko, Tokyo Gakugei University
ANNO, Kyoko, Shizuoka University ZHONG, Hui, Hunan University

概要：『日本語初級総合教程』及び『日本語中級総合教程』（CD-ROM 付き）は中国初のマルチメディア型日本語教材であり、中国の大学等の第二外国語学習に広く使用されている。本発表では、企業職員のための日本語短期研修コース（約3ヵ月）で使用した結果、おもに事後テスト及びアンケート調査の結果分析を通して、このマルチメディア型日本語教材の有効性について検討する。今回の調査データは、量的にも被験者の等質性の観点からも限定的なものではあるが、マルチメディア型日本語教材を使用したコースではそれを使用しなかったコースと比べ、特に聴解能力において学習効果が見られた。

キーワード：マルチメディア型日本語教材，学習効果，短期研修コース，聴解能力

1. はじめに

中国初のマルチメディア型日本語教材『日本語初級総合教程』（2002）及びその続編である『日本語中級総合教程』（2006）は、刊行以来中国の大学及び専門学校の第二外国語学習に広く使用されている。このシリーズ教材の特色は、文字テキストだけでなく文字・音声・動画・画像などを一括処理した CD-ROM を通して「聞く、読む、話す、書く」という四技能の総合的な習得を目指した点、場面や相手に応じた運用能力の育成に重点を置いた点、社会的文化的な知識に配慮した内容などにあるが、実際にその学習効果はどうか疑問に思われがちである。

大学の多人数構成のクラスにおいて本教材を使用した実践報告としては李（2005）があり、急増する学習者と教師不足への対応策として、800名を超す履修者が8教室に分かれて受講し、最終的に履修者の9割が最終試験に合格したことを報告している。本発表では、企業職員のための短期研修コースという、李（2005）とはまったく異なるクラス形態での授業実践

の結果分析を通して、このマルチメディア型日本語教材の有効性と可能性について報告する。

2. 『日本語初級（及び中級）総合教程』（CD-ROM 付）の概要

『日本語初級（及び中級）総合教程』（CD-ROM 付）は、中国政府や日本の独立行政法人国際交流基金の支援を得て、湖南大学外国語学院日本語学部の李姐莉を中心とする研究グループが作成したものである。内容的には、中国教育委員会の審査を受けた「大学日語教育大綱」及びその改訂版である「大学日語第二外語課程教学要求」に基づいている。この教材の開発目的は、コンピュータの優れた機能を利用したマルチメディアによる学習法を日本語教育に取り入れ、さまざまな目的をもって学ぶ中国の日本語学習者に有効な教材を提供することにある。学習時間は初級・中級を合わせて 240 時間に設定されている。日本語を第二外国語として学習する大学生や専門学校の学生を主な対象としているが、日本語を専攻している学生や留学希望者、一般社会人のクラスでも使用されている。

学習者が操作可能な主な機能は以下の通りである。

1) 学習者は自分のニーズに合わせて、単語の辞書機能、文単位の音声・中国語訳などの機能を選択し、繰り返し練習することができる。

2) 録音機能を活用し、学習者自身の発音とモデル発音を比較することができる（『初級』）。

3) 課ごとにテスト問題（日本語能力試験の問題形式に準拠）があり、自動採点機能を利用して修得状況を把握することができる。

4) アニメ画像やスキット（『中級』）を視聴することによって、場面や相手に応じた日本語表現のバリエーションを意識化することができる。

以上の機能を駆使することにより、学習者が能動的に学習に取り組むことができ、学習のモチベーションが高まるという効果がある。

なお、『日本語初級総合教程』は 2001 年に作成した日本語教育用インターネット教材「日本語初級教程」をもとに作られたもので、中国の「十五（第 10 次 5 ヶ年計画）国家級企画教材」として中国高等教育出版社によって出版されて以来すでに 10 刷となっている。また、『中級』は 2006 年 4 月に出版されたばかりであるが、同年 10 月には『初級』とあわせて中国の「十一五（第 11 次 5 ヶ年計画）国家級企画教材」に選出され、2008 年に再版されることが決まっている。

3. 日本語短期研修コースの概要

上述したマルチメディア型日本語教材が実際の日本語教育現場でどのように使用されているかについて、中国全土においてはまだ具体的な調査が行なわれていないが、湖南大学における本教材の使用者はすでに 2000 人を超えている。主として日本語を第二外国語として選択した理工系の学生を対象に設けた多人数構成のクラスで使用されてきたが、2006 年から

は中日合弁企業の職員を対象とする短期研修コースでも使用している。

日本語短期研修コースの概要は以下の通りである。

学習者 : 中日合弁企業 A の職員 19 名 (平均年齢約 28 歳)

(日本語学習歴は、約 1 ヶ月 : 14 名、3 ヶ月 : 1 名、6 ヶ月 : 2 名、1 年 (独学) : 2 名である)

学習期間 : 2006 年 3 月 27 日 ~ 7 月 7 日 (週 30 時間、総学習時間数 450 時間)

学習科目 : 「総合日本語」 (240 時間)、「会話」 (60 時間)、「文法」、「聴解」、「読解」、「総合テスト」、「ドラマ鑑賞」 (各 30 時間)

使用教材 : 主教材として「総合日本語」で『日本語初級 (及び中級) 総合教程』 (CD-ROM 付) を使用した。他の科目の教材選択は各科目の担当教師に任せた。

学習目的 : 日本語の「聞く・話す・読む・書く」の四技能の基本訓練を通して、発音・基本文型並びに文法、基本語彙を含む約 2000 語の習得、またそれらを駆使して現場の日本人と簡単なコミュニケーションができるような運用能力の育成を目標とする。

学習進度 : 『日本語初級総合教程』は終了。『日本語中級総合教程』は第 1 ユニットののみ終了。『日本語初級総合教程』の想定学習時間は 150 時間、『日本語中級総合教程』は 100 時間であるが、学習者の年齢や集中コースであることを考慮して、進度を調整した。

4. 事後テストおよびアンケートにみる学習効果

コース終了時に日本語能力試験 3 級 (2005 年度のテスト問題を利用) を実施した。結果は、「文字・語彙」平均 76.8 点、「読解・文法」平均 152 点、「聴解」平均 42 点であった。これらはいずれにおいても、同時期に行なった湖南大学日本語学科 1 年終了時のテスト結果を上回った。ちなみに、日本語学科 1 年生 (21 名) のテスト結果は「文字・語彙」平均 69.6 点、「読解・文法」平均 137.2 点、「聴解」平均 31 点であった。日本語学科 1 年の場合、短期研修コースの「総合日本語」に相当する科目の学習時間数は 320 時間 (週 10 時間) であり、主教材は紙媒体の教科書を用いた。両者は期間、対象とも異なり、比較は限定的なものではあるが、短期研修コースの学習者が一定の学習効果を取めたことは認められよう。特に、例年の日本語能力試験で中国人受験者がもっとも苦手とする「聴解」の成績に差が見られた。

コース終了時にはテストの他にコースに関するアンケート調査を行なった。調査項目は学

習者の基本状況、学習目的と目標、カリキュラム、使用教材及び学習効果などに及んでいるが、ここではこのコースで使用した『日本語初級（及び中級）総合教程』（CD-ROM 付）に関する設問の回答に絞って報告する。

使用したマルチメディア型教材に対する満足度に関しては、19名のうち「満足」14名、「普通」5名であった。どのようなタイプの教材が好きかという選択式の設問に対しては、全員がマルチメディア型教材を選んだ。その理由は次のようなものであった。

- 1) (CD-ROM に吹き込まれている) 発音がきれいで、模倣するのに便利。練習するのに役立つ。
 - 2) (CD-ROM の) プログラム操作が容易なので、独学するのに便利。
 - 3) 「聞く・話す・読む・書く」を同時に学習することができる。特に「聞く・話す」能力を高めるのに役立つ。
 - 4) パソコンが普及しているので、学習者は都合のよい時、または自分のレベルに合わせて(CD-ROM を使って)学習できる。
 - 5) 視覚的に印象深い。直接(日本人と)交流しているような感じがする。それに対し、テープ教材は比較的単調に感じるだけでなく操作するのにも不便である。
 - 6) 効率的で操作が簡単なのはこのマルチメディア教材の大きな特徴である。
- 学習者は CD-ROM の操作性の良さや音声や動画の利点に言及しており、それらが学習者の学習意欲を喚起していることが窺われる。その一方で、以下のような問題点や改善すべき点についても指摘している。

- 1) 文法的な説明は不十分である。さらに系統的に具体的に説明してほしい。
- 2) 各課の難易度は均一でないところがある。課によっては単語の量や文法項目が多すぎる。
- 3) 文法項目の提出順序に不合理なところがある。例えば、「動詞の活用」と「使役表現」の出し方は量的にも位置的にも不適當で、習得しにくい。
- 4) CD-ROM のアクセスがうまくいかないところがある。プログラムにも問題がある。
- 5) 内容的に重複しているところがある。各課の関連性において改善すべきところがある。
- 6) 文字テキスト+CD-ROM+テープの形態は良いが、個人的に使いやすい MP3 を加えればさらに喜ばれるであろう。

以上の回答結果を見てみると、学習者は内容的側面からだけでなく、技術的側面からもマルチメディア型教材をよく分析している。今回の短期研修コースの学習者が全員パソコン操作に習熟していたことも、学習効果をあげた要因であろう。前述したように今回の調査デー

タは量的にも被験者の等質性の観点からも限定的なものであるため、マルチメディア型日本語教材の有効性の一端が見られたにすぎないが、日本語環境がない中での運用能力の育成にこうした教材が有効に働きうる可能性を見いだすことができた。

5. 今後の課題

マルチメディア型日本語教材のあるべき姿に関しては、鄭（2003）において様々な角度から調査、議論されている。マルチメディアの長所を十分に生かしていないものであれば、内容的に充実しているものであっても伝統的な紙媒体の教材と変わらないであろうし、逆に、内容的に貧弱なものはマルチメディア教材の形にしても喜ばれないであろう。今後も授業実践を通して教材の検証を行ない、内容的にも技術的にも改善を加えていきたい。また、今後の課題として、マルチメディア教材を使用する際の教師の役割についての検討があげられる。どのような形で教師との双方向的通信を可能にするか、教師がどのような役割を果たすことでよりよい効果が得られるか、具体的に検討を加えていきたいと考える。

参考文献

- 鄭起永『マルチメディアと日本語教育—その理論的背景と教材評価—』凡人社，2003
- 李姐莉・案野香子「日本語マルチメディア教材の開発をめぐる—日本語初級総合教程（CD-ROM 付）を中心に」『2004年日本語教育国際研究大会予稿集 発表2』（70-75），2004
- 李姐莉「大学非専攻日本語学習者のマルチメディア教材の利用状況をめぐって：湖南大学の実態調査を中心に」『世界の日本語教育』第15号，国際交流基金（1-24），2005

